

---

印

空乃落物

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

印

### 【Nコード】

N5061Z

### 【作者名】

空乃落物

### 【あらすじ】

あるもののせいで人間や動物が化け物になってしまふ世界「ストレイス」。その世界を旅する二人の男女、コロとスズメ。美形だが普通の、心の優しい青年コロと、彼を慕い、淡い恋心を抱くスズメ。二人はいろいろな国や町を転々として、目的地へと、そして自らの復習を果たすべく移動する。

ある町ではその支配者と喧嘩をすることに、旅の途中では自らの過去を振り返り、ある国ではその制度を正すために国に対して宣戦布告をしてしまったり……。いろいろな体験をし、友や仲間

を増やしながら使命を果たす旅の物語。  
僕流の冒険アクションラブストーリー！。

旅の日誌：1 旅人と出会った町（前書き）

ゴーンゴーンゴーン……。

少しだけ欠けている太陽によつて、金色に輝く大きな鐘が鳴り響く世界一の大都市、クラウ<sup>シティ</sup>街。その都市の真ん中に国家公務員が勤める役所がある。それに名はない。ただ『役所』と呼ばれているだけ。役所を囲うように建てられている五角柱の形をしている五つの塔、それぞれのの上に、先ほど鳴った大きな鐘がある。

この街はある人々にとつて『始まり』と『終わり』を意味する。それはなぜか？

今はまだわからない。理由は……これから始まる物語で……。

## 旅の日記：1 旅人と出会った町

“ 武装義務条例 ”。

これはその役所が世界の人人々に向けて制定した規則。制定されたのには理由がある。それが、『印』。

この世界「ストレイス」には『印』と呼ばれるものがある。

役所が造った所謂「術式」のようなもの。それは人や動物など、生き物に「刻む」ことで「能力」が発揮される。

それが刻まれた「生き物」は『印』に描かれているモノの「能力」を得られる。しかしそれと共にその生物の容姿も一緒について来る。

『印』は鉱山などから採掘される特殊な鉱石を加工、装飾をして出来る。その加工と装飾の過程により、発揮される「能力」が変わる。

『印』は刻まれるのはその者の表面にだが、それはそこから全身の細胞を変化させて、完全な「怪物」となってしまう。そういうもの。

『印』を刻む方法はいろいろあるが、一般的にはその鉱石を熱し、ハンコのように押し当てて刻む。所謂「焼印」のようなもの。だが『印』は役所が刻む。その役所が『印』を刻むに相応しいと認めれば刻められる。

盗賊のそのような奴らは『印』を体に取り込ませる。方法は簡単ではない。その鉱石は熱しすぎるとドロドロに溶け、溶岩のようになる。それを利用し、溶けた鉱石を注射のように注入させる方法、飲み物のように飲ませ取り込ませる方法、食べ物に混ぜ込む方法、のようにいろいろある。だが、そのように取り込ませる方法は「犯罪」だ。その者のDNAやその他の細胞組織が破壊してしまい、人

やその形の形すらなくなるかもしれないというリスクがある。それは「殺し」と同じこと。

だから刻む場合は役所に申請し、許可を得て、正しい方法で刻んでもらう。だが『印』は役所が刻む。その役所が『印』を刻むに相応しいと認めれば刻められる。

『印』の能力を発揮させるには、それを刻まれたものが自らの意思で発揮させるか、もしくは何か血が滾り、神経が高ぶると勝手に発揮されてしまう。その能力が解放されるのも自らの意思か、それとも戦闘の意思を削そがれるかだ。

しかし時折その鉱石を偶然でも掘り当ててしまう者や、盗みを働きそれを得る者がいる。そいつらは自分らで加工、装飾を施し、『印』を造り上げる。そして自らの、もしくは他の人や動物に無理にでも刻み、それをを用いて犯罪などをする。そんな輩が出てきたから、“武装義務条例”が制定された。

夕日が地平線の下に落ち、もう暗くなる時間。ある町にある宿、その中。宿はほとんどが木製で出来ている。その宿に二人の旅人が入っていった。

「すいません、宿主。宿に泊めて頂きたいのですが」

大きなフードが付いているコートを羽織っている男がフードを取り、顔を見せる。見た目は19歳ほどで、本当に見た目どおりの年身長は170cm弱。黒髪で、黒い瞳。顔も普通、目は少しつり目、鼻は高くもなく低くもなく。体格も痩せ過ぎではないが細い。普通の男だが、美男子に見えなくも無い。しかしおっとりとしていそうな、動きが鈍重そうだ。ただ一つだけおかしいのは、両手に革で作られているグローブをはめている。何がおかしいか、と聞かれれば、

なにも、と答えるが、なぜか違和感がある。その手には革製の大きなトランクを持っている。

その隣には女が同じようなコートを羽織っているが、もともとそれを被っていないかったので、性別はすぐにわかった。見たところ17歳くらいに見えるが、本当は21歳。身長は155cmほど。髪は肩甲骨の少し下くらいまでで、明るい栗色に染まっている。それをうなじの辺りで結つてある。体格は全体的に細いわけではなく、出るところは出ている。黒い目で、顔は整っていて可愛い。女の方は背中に何やら棒状の物を背負っている。

二人とも和の国の出身だ。

「ああ、はいはい。お二人、ですか。部屋はご一緒で？」

男は頷くと、カウンターの向こうで椅子に座っている宿主は、何か紙に書き、ペンを彼に渡す。宿主は白髪交じりの髪と顎鬚あごひげを持っている優しそうな初老のおじいさんだ。

指で一部を指し、サインをするように言う。

「旅のお方ですか？この町へはどういったご用件があたりで？」

「そういうものはないです。ただ気の向くままに來ただけで」

男はサラサラと二人分の名を書き、宿主に返す。それを見ると、

ローマ字だが、二人の名がわかる。一応漢字で紹介すると、男の名は桐島虎狼キリシマコロ、女の名は宮子雀ミヤネスズメと言うそうだ。

宿主は先ほどの答えに「そうですね」と言うと、それを受け取り、その紙に新たに何かを書き加えながら彼らに問う。

「お二人は恋人同士で？」

スズメはその言葉で頬を赤く染め、恥ずかしそうに俯く。

それに反し、コロは笑顔でサラッと否定する。

「いえ、違いますよ。ただの旅の連れです」

「おや、そうでしたか。でも、お二人はお似合いですよ」

「ありがとうございます」

スズメは即座の否定に頬を膨らませるが、「お似合い」と言われ嬉しくも恥ずかしそうにまた俯く。

「ああ、そうだ。お二人の所持武器をお教えください」

これはほとんどの宿泊地がやっている事。よっぽど危ない物であったり、部屋に入れられないような物であるなら、宿主が預かるためにしている。

二人は自分の背後からそれを見せる。コロはマントの中、腰にぶら下げていた物を、スズメは背に背負っていた物を。十手じゅうてと棍棒こんぼうだった。

宿主は十手を見るのは初めてのようで、彼に説明を求める。

「これは十手と言って、ボクの出身の和の国で使われている自衛用の武具です。まあ、これで戦う事ももちろん出来ますけど」

十手は、30cm - 1mほどの鍛鉄・真鍮・鍛銀（打ち伸ばした銀）と言った金属や、樫・栗などの堅牢な木でできた棒の手元に鉤かぎをつけた武具・捕具である。敵刃からの防御に用いたり、突いたり打つなどの攻撃、時には短棒術として用い犯人の関節を極める・押さえつける・投げるなど柔術も併用して制圧し捕縛に用いる。（[Wikipedia参照](#)）

7

彼はそれを二つ腰にぶら下げていた。それらはどちらも鍛銀製で、二つを用いて戦うようだ。

「はい、了解しました。お嬢さんの方は、棍棒ですな」

「ええ、そうです」

棍棒は、武器や道具の誕生時に生まれた古い武器の一つである。

一端を打撃部分として大きく重く加工したり、金属での補強や柄頭を別個に取り付けることで慣性モーメントを大きくし威力を上げるように設計される。また打撃部分に刃やスパイクを取り付け殺傷力を強化した棍棒もみられる。（[Wikipedia参照](#)）

彼女のそれは木製。だが見た目ほど軽くはない。結構重いのだ。



それが終わると、部屋に案内する前にと、宿主はその宿について彼らに説明をする。

- ・この宿は三食、風呂、トイレ付き
  - ・食事は広間で食べる
  - ・部屋で食べる場合は予め伝えておく
  - ・この宿での騒ぎは禁止
- それを破った場合は宿泊費に慰謝料が加算される
- ・宿を出るときに宿泊費、食事代などを払う

この四つ。それと町について忠告。

「最近この町では銃装備をした若い輩が場所を問わず襲ってきて所持金や所持武器が盗られる。気をつけなさい」

「ご忠告、ありがとうございます」

二人は宿主に頭を下げ、礼を言った。それを見てから宿主は彼らの泊まる部屋を口頭で指示する。

「ああ、あなた方の部屋は二階の突き当たり、窓際です」

「はい。ああ、そうだ、晩ご飯は部屋でとらせて頂きますので」

「承りました」

椅子に座ったまま頭を下げる。

二人は階段を上り、指示された部屋に向かう。指示された部屋の扉を開けると、そこも木製。机、椅子、ベッド・シーツや布団以外はほとんどが木製の物。

スズメはコートを脱ぐと、ベッドに座る。彼女はコートの下に袖の長い服と、踝くわだまであるジーンズのようなズボンをはいている。動きづらそうに見えるが、結構動ける。

「あー、疲れたあ！」

腕をぐぐつと上に伸ばし、そして下ろす。

結構な長旅だったのだろうか。

「ねえ、虎狼？」

「そうだね。今日はもう休もうか。日も落ちきって、暗くなりかけてる。夕食を食べて、明日に向けて体を休ませよう」

にこやかにスズメに言い、コートを脱ぐ。赤茶色の半袖、その上に黒い色のゆったりとした長い袖の服を着て、濃いグレーのズボンをはいている。そのズボンも少しゆったりとしているもので、動きやすそうだ。

「今日もたくさん歩いたあ！お風呂入りたいな」

「宿主に聞いてみようか？」

それをスズメに尋ねると、すぐに部屋のドアがノックされた。コロがどうぞと声をかけると、ドアが開き、宿主が入ってきた。その手にはパンが二つ入ったバスケットを持っている。それについて尋ねてみると、サービスなんだとか。

「夕食とのつながいと思ひまして。少し時間がかかりますので」

「そうですね。わかりました、ありがとうございます。あ、それと、彼女がお風呂をいただきたいと・・・」

「ああ、お風呂ならいつでも入れますよ。一階のフロントにすぐそばにある扉から入れます。・・・ただ・・・ここのお風呂はひとつしかなくて、混浴となっていますが・・・」

「そうですね、ありがとうございます。あとで伺いますので、その間に食事の準備をしてもらっていいですか？」

「わかりました、お待ちしています」

それではと言い残し、宿主はドアを閉め、帰っていった。そこで彼女は疑問に気づく。誰しもが思うひとつの疑問。

「ね、ねえ虎狼・・・今、混浴っていつてなかった？ねえ？」

困惑して、顔を暗くして、あせったようにコロに尋ねる。それでもコロは、言っただねえとのんきに答える。

「ねえ、なんでそんなのんきな？ねえ!？」

ますます暗い表情になり、少し絶望感が漂っている。まあ、この宿には他に宿泊客がいて、そう思うのは当然なことなのだが。

「大丈夫だよ、ボクも一緒に行くから」

それを聞くと、彼女の表情は絶望の暗さからはずかしくて真っ赤に変わった。何言ってるのと、恥ずかしさから声が裏返り、変な声になって言った。それでさらに赤くなり、顔を伏せる。

「一緒に入るとは言っていないけどね……。まあ、見張りとしてね、入り口近くで」

「え、あ、ああ……。そういうこと……」

安心したのになぜかブルーになっている。ちよつと残念、と思っ  
ているように見える。それとも、一緒に入る？とコロが尋ねると、  
また顔を真っ赤に染めて、両手を広げて左右に振り、否定する。コ  
ロはハハハと笑うと、部屋の外に出てしまい、スズメもそのあとに  
ついていくように部屋を出る。

カウンターのそばにあるドアに「B a t h」と書かれていた。そ  
こが風呂場なのだとすぐにわかった。

「おや？お二人で入るのです？」

「いえ、ボクは見張りとして。やっぱり女性ひとりでは危険だと思  
うので」

「ですが、一応カギはつけてるのですが……」

「それは外から開けられるでしょう？もし開けられたとしたとき、  
中にいる人は何も出来ない。だからですよ」

宿主は言わんとしている事を納得すると、カギを開け、風呂場に  
通ず。

風呂場は、入ってすぐに脱衣所があり、その奥にはもうひとつド  
アがある。そこを開くと、木で囲われた湯船があり、和の国にある  
温泉にそっくりだった。一応風呂場の中をのぞく。そこに誰もいな  
いことをスズメに伝えると、入浴のために服を脱ぐ。

「じゃ、じゃあ、服脱ぐから、こっち、見ないでね」

「大丈夫だよ」

湯船に続く扉を背にして、コロはその場に立ち尽くす。目を閉じ、  
耳をふさぎ、入ってきたドアを見る。

やがて服を脱ぎ終えたのか、後ろからドアが閉まる音が微かに聞

こえ、耳をふさいでいた手を取り、目を開け、奥のドアにもたれるように立つ。

「お風呂どう？気持ちいい？」

「うん。気持ちいいよ・・・」

とろけるような、というよりもとろけた声で言い放つ。よほど気持ちのいい湯加減なのだろう。それに最近旅続きだったので、風呂には入れず、川や湖で水浴びをしていた。だからお湯という時点で気持ちがいい。

「上がるときは言っただけ。また目を閉じるから」

「うんー。わかったあ」

それからしばらくして、スズメは満足した満面の笑顔で風呂から上がり、コロが目を閉じている間に体を拭き、下着をつけ、服を着た。

それと入れ替わるように、今度はコロが服を脱いで、風呂に入った。しかし彼女と違い、早く、十分ほどすると上がった。

二人とも風呂をいただくと、部屋に戻り、晩ご飯を食べた。その日のメニューは、宿で出してもらった新たに出されたパン、クラムチャウダーのスープ、チーズがかかっている蒸かしたジャガイモ。それらを美味しくいただき、コロがカウンターまで、木でできた皿やスプーンを、持っていった。コロが戻ると、スズメはまだ起きていて、彼を待っているようだった。

「どうしたの？寝ててって言ったのに」

「うん。ちよつと、この町のことだね」

彼女からすると、この町に住んでいる人、宿に着くまでに見た人々のことを気にしているようだ。それは彼も気付いていて、うなずき、同意見が帰ってきた。

「・・・ボクも気になつた。目とか、においが」

「そう。においはわかんないけど、私も目は気になった。なんていうか、生気がないっ言うか、光がないっ言うか・・・」

「うん、そう。あれは何かに恐れている目だった」

何に對して、なぜ、何があつた、そういうことについて言葉を交わすが、話がまとまらない。とりあえず明日、町を歩いてみて、人々の行動や言葉に注意を払い、見て聞いてから、ということになり、本日は眠りについた。

翌日、二人は目覚めのよい朝を向かえ、気持ちよく起きることができた。

その日の朝食は、宿主が言っていた広間で食べることになった。朝食は、スライスしたパンを二枚、目玉焼きにした卵一つ、こんがり焼けたベーコンを三枚、そしてヤギの乳。

それらを完食すると、部屋に戻り、支度をして、昨日のとおり外出をすることにした。

「・・・よし、とりあえず、町に行つて、情報集めしようか」

彼は、そう言つて立ち上がり、スズメにも立つように促す。うんとうなずき元気に立ちあがる。そして二人で共に部屋から出て、宿主に外出を告げる。

「少し外に出ます。明日にはここを発つので、次の旅に向けて買出しをしに」

「ああ、そうですね。それなら、いい店を知ってますよ。いつてらっしゃい」

宿主は紙に何かを書くと、コロに渡し、手を振つて見送りをした。

二人はまず、宿主が紙に書いたものを見る。そこには筆記体で「Mierla」と書かれていた。

「ミエラ？何だろう・・・」

「・・・何を売つてるのかな・・・？」

二人の感想は違うものだった。宿主と彼との会話を聞いていなかつたスズメは「何か」を思い、話をしていた本人であるコロは「何を売るか」を思った。

とりあえず「二人は百聞は一見に如かず」ということで、その「

Miela」に行ってみることにした。着いてみるとそこは食べ物  
を売っている店だった。林檎や蜜柑といった果物を売る店のようだ。  
いい店って言うから何でも売ってるのかと思ったのに、とコロは心  
の中で思った。

「はい、まいどありい」

その店で林檎とバナナを買い、次の店に向かう。足を運んだのは  
昼食を食べられる店。「腹が減っては戦は出来ぬ」とスズメがいう  
ので。ていうかただ単に空腹なんだろうに。買った果物を入れてい  
る紙袋を抱えてそういつた店を探す。しかし時間はちょうど昼ごは  
ん時。だからどの店もいつぱいですぐには食べられそうにない。

そんな中、開いているのに、一軒だけ誰も寄り付こうとしない店  
を発見した。その料理がよっぽどまずいのだろうか？そうスズメ  
は思い、小声でコロに聞いてみるが、違うだろうとそれを否定する。  
もし不味いのだとしても誰か数人は店にいて、店員は客寄せをして  
いるはず。でもそこは違う。開店はしているのにもかかわらず、店  
から人の気配をほとんど感じない。そのうえ、指を指して陰口をい  
う人もいないし、文句をいう人もいない。むしろ係かかわりうとしてい  
ない。とはいえ、スズメの空腹が頂点に達しかけている。もう迷っ  
ている暇も待っている暇もない。二人はとりあえずその「誰もいな  
い店」に入った。

そこには、ただ椅子に座ってテーブルに肘をついている老人一人  
を抜けば、誰もおらず、調理や下ごしらえをしている音もなく、静  
まり返っている。

老人は二人が入ってきたのに気づくと、すぐに追おい返そうとした。  
「ん？誰じゃ、客か？出てけ、ここはやめておけ。町のやつらに  
白い目で見られることになるぞ」

「あなた、この店主ですか？おかしいことをいいますね。ボク  
たちはご飯を食べに来ただけですよ。なぜそんなことを？」

コロは笑みを浮かべながら、疑惑を持たぬ声で、その老人てんしやうに尋ね  
る。すると店主はキツと睨むような目つきで見て、きつい口調をし

て、言葉を投げ返す。

「ふん、どうでもいい。お前ら旅のもんだな？よく聞け。ここには知らなくてもいいことがあるんだ。首を突っ込むと痛い目にあう」

「この町の秘密、ですか」

それを笑顔のお面をつけたような素顔で聞くと店主は驚きの表情を見せる。

「お前、なんで・・・!？」

その問いに耳を貸さず、二人はたくさんあいている席の中から、店主が座っている椅子のあるテーブルの隣のテーブルの席に二人並んで座る。

「まあ、『腹が減っては戦は出来ぬ』ってことで、とりあえずご飯を、お願いしても？」

「・・・知らん言葉だな」

「ボクらのいた和の国の諺ことわざ、というもので、『空腹では戦うことが出来ない、何はともあれ腹はらごしらえをしなければならぬ。何事も十分な用意が必要だ。』という事です」

「ほう、そうか」

とりあえず昼食に適当に頼み、準備をしてもらう。そのときにスズメがアルコールの類を頼もうとしたが、それをコロが阻止して、結局なしに。

昼食を作ってもらっている間、二人は暇で、これからの算段でも話そうということになったのだが、始めてから少しするとなにやら外が騒がしくなってきた。店のドアを少し開けて二人して外の様子を伺ってみると、そこにはガラの悪い連中が数人、町で暴れていた。

次へ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5061z/>

---

印

2011年12月17日02時56分発行